

## イスラーム金融とは何か

東川 繁

「イスラーム金融について何か知っていますか？」ある経済関係の講演会があったおり、知人の助けも借りて周囲の参加者に尋ねてみた。「利子を禁止しているらしいが、それ以上はわからない」という答えが多かった。「利子を伴わない金融制度がどうして成立するのか？」と逆に質問されたりもした。

このように、イスラーム金融はまだ日本ではなじみの薄い仕組みだといえる。しかし世界的にみると、イスラーム圏を中心として既に七〇カ国以上で導入の実績を持つという。しかも、年一五〜二〇%の高い成長率を示しているらしい。ロンドン、シンガポール、香港といった主要な国際金融センターにおいても、その地位向上と競争力強化を目指し、イスラーム金融の拡大に努めている。その一方、この分野での日本の取り組みの遅れが指摘されている。

そこで、イスラーム金融についての理解を深めていたため、参考となる日本語図

書を紹介してみよう。出版時期は、この分野に関する一般向けの書籍が出版され始めた二〇〇七年以降に限定する。

糠谷英輝著『拡大するイスラーム金融』（蒼天社出版二〇〇七年九月）は、この分野に関する単行書としては最も出版時期の早いもの。イスラーム金融の基本原則、金融市場および金融機関の現状、課題と展望など、全体的にバランスの取れた構成となっている。著者は財団法人国際通貨研究所主任研究員。同じ著者によるものとして、糠谷英輝著『世界を席巻するイスラーム金融』（かんき出版二〇〇七年二月）がある。前著作と類似の目次構成からなる概説書。また、糠谷英輝著『東マナーとイスラーム金融』（同友館二〇〇八年五月）もある。書名の通り、前半をオイルマネーと湾岸諸国経済の動向分析に、後半をイスラーム金融の解説に充てている。

糠谷著作と同様、早い時期に出版されたものとして、吉田悦章著『イスラーム金融入門』（東洋経済新報社二〇〇七年一〇月）がある。概説書であるが、日本におけるイスラーム金融の位置づけと、日本の金融機関の取り組みにも触れている。イスラームになじみのない日本の読者に何とか制度の仕組みを伝えようという熱意がうかがえる。著者は国際協力銀行に所属するイスラーム金融の専門家。著者には、吉田悦章著『イスラーム金融はなぜ強い』（光文社二〇〇八年一〇月）という新書版の著作もある。イスラーム金融の基本原則、金融取引の基本概念、商品取引の実際

に重点を置いて解説する。入門書としての役割が期待できよう。また、共著として北村歳治、吉田悦章著『現代のイスラーム金融』（日経BP社二〇〇八年二月）がある。概説書の構成を取ってはいるものの、利子概念の明確性の問題、イスラーム金融のガバナビリテイの検証、など専門的な内容も含んでいる。

このほかの文献についても刊行順で紹介しておく。イスラーム金融検討会編著『イスラーム金融：仕組みと動向』（日本経済新聞出版社二〇〇八年一月）は、民間大手金

融機関に所属する行員と国際協力銀行の行員で構成される「イスラーム金融検討会」の、一七人による共同著作。イスラーム金融の市場、制度、機関実務、契約と広範で網羅的な記述となっている。参考図書的な利用方法も可能であろう。

前田匡史著『詳解』イスラーム金融…世界を動かすダイナミズム』（亜紀書房二〇〇八年四月）は、急拡大するイスラーム金融の動きを追う一方で日本の立ち後れを指摘し、積極的な参入の必要性を説いている。

櫻井秀子著『イスラーム金融…贈与と交換、その共存のシステムを解く』（新評論二〇〇八年九月）は、贈与、交換、エートスといった経済人類学的な分析枠組みに依拠しながら、イスラーム金融の今日的意義について本格的に考察した研究書。イスラームの思想や社会についての予備知識がないと、読むのに困難が伴うかもしれない。

バハレーン中央銀行著、今平和雄、渡辺喜宏訳『イスラーム銀行とイスラーム金融』（PHP研究所二〇〇九年九月）は、中東における有力な金融センターであるバハレー

ンを中心に、イスラーム銀行における業務の実際と金融市場の現状を解説したもの。各種規制や関連機構の役割など制度面の記述も詳しい。

小杉泰、長岡慎介著『イスラーム銀行…金融と国際経済』（山川出版社二〇一〇年一月）は、イスラーム学・中東地域研究の専門家と、イスラーム経済・金融研究の専門家による共著。イスラームの思想的源流から話を起こし、金融制度の発展への道筋をわかりやすく語る。ページ数も少なく、読みやすい。歴史図書専門出版社らしい本である。

最後にアジア経済研究所の成果を紹介しておく。福田安志編『イスラーム金融のグローバル化と各国の対応』アジア経済研究所 調査研究報告書（二〇〇九年三月）は、外国人二人を含む九人の研究者の共同著作。地域的には中東、南アジア、東南アジアのほか、非イスラーム国（英国およびシンガポール）を取り上げている。本書は、その全文を当研究所のウェブサイトにダウンロードすることができる。（ひがしかわ しげる／図書館資料企画課）